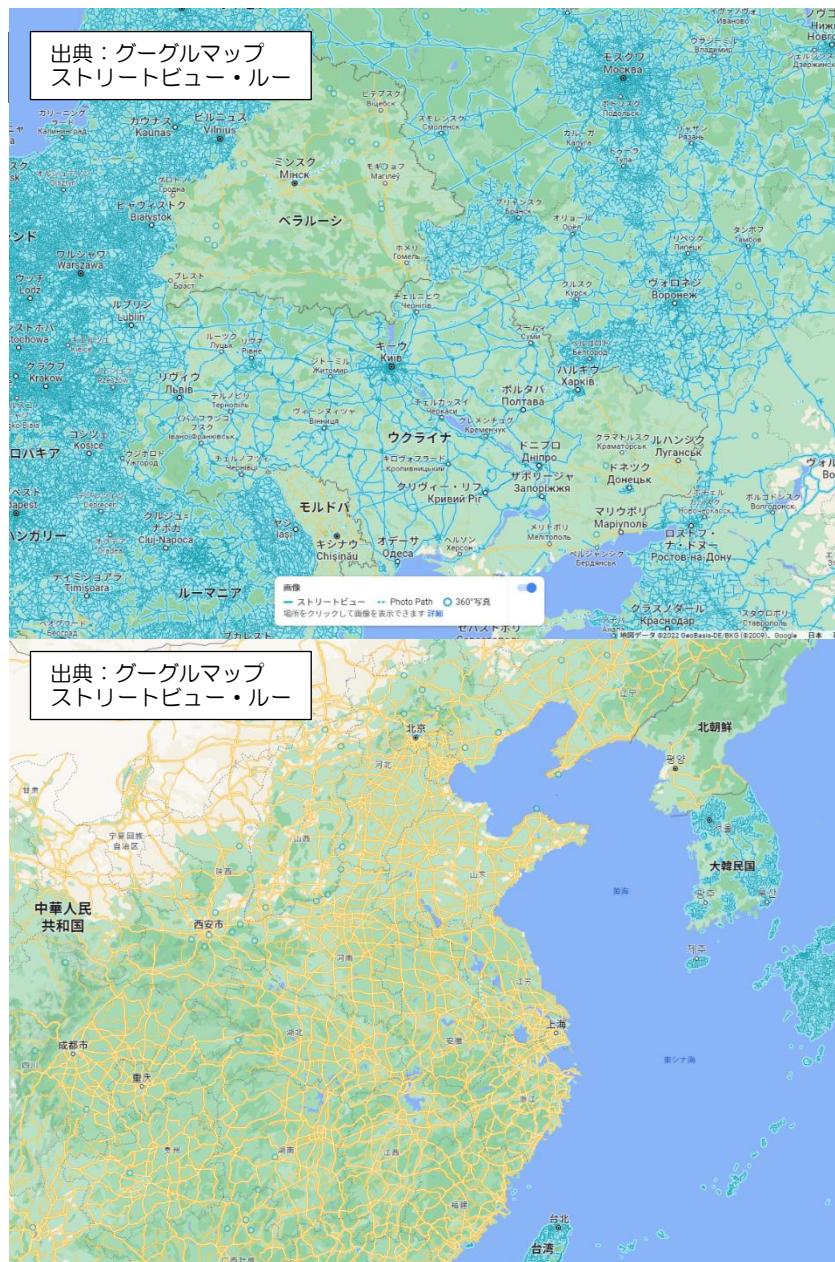


土木屋の読書と旅（17）

令和4年7月

池内 紀（文学者・エッセイスト）は『きまぐれ歴史散歩（中公新書）』を次のようなまえがきから始めている。『「歴史散歩」などと、ちょっとりきどっている。歴史的事件の現場、由緒ある土地、ゆかりの人の出生地……歴史という目じるしがあるので気分がラクである。ラリとでて、フラフラしていても単なるラクつきではなく意味のあるフラフラに思えてくる。歴史の「洗礼」を受けた土地には、不思議なオーラがある。たたずまいが微妙に違うのだ。』

たしかに大人の旅のにおいがする。ではこの流儀に従って、どのような現場、土地を訪れてみようか。



ストリートビューができるルートを表示（上図青色ライン）意外なことだがロシア(モスクワ)もウクライナ(キーウ)もストリートビューができる(侵攻前の貴重な映像あり)。隣国中国は情報管理下にあるためか位置固定の360°写真のみ。ただし、地図をどんどん拡大していくと北京では故宮博物院の中(観光ルート)にだけストリートビューが出現する。

コロナ禍を言い訳にはしたくないが、加齢の進行とともにだんだん気力、体力が衰えてきたような気がするので、アームチェア・トラベラー（書斎の旅人）を気取つて今回の旅の方法論を考えてみる。

作家・池澤夏樹の言葉：『知らない町に来て、…その風景を何とか知っている町と重ねて理解しようと試みる。空間の旅行がそのまま過去の日々への時間の旅になる（「うつくしい列島」河出文庫）』

わたしには何とか重ねて理解すべき町の風景のストックは少ない。したがって、インターネットの活用とある程度評価の定まった本をベースに、体力の心配をすることなく視覚的にリアルな歴史的土の雰囲気を（もちろん妄想のレベルで）体験することとしたい。

最近の新聞報道で気になった歴史的事件は「ロシアのウクライナ侵攻」と「天安門事件から33年」の記事。

グーグルマップを開き、ストリートビュー

土木屋の読書と旅（17）

令和4年7月

「ロシアのウクライナ侵攻」については現在進行形の事件であり、たとえ夢想の旅であっても対象とするのは心情的に心苦しい。したがって今回は、北京中心部への時空を超えた旅に出発することとする。

旅するにあたって、参考文献として一番信頼できる本は何だろう。歴史的な事件の解釈とその評価について、一般教養の知識としては高校の歴史の教科書で充分ではないか（なにせ国の検定済みであるので対外的な批判に耐えうる、との心理的な安心感が期待できる）とわたしは思っている。嘘のような話であるが、先月（6月中旬）県立図書館に行くとロビーで、これを読んでくださいと言わんばかりに最新の検定済み教科書をズラリと並べて展示していた。

* * *

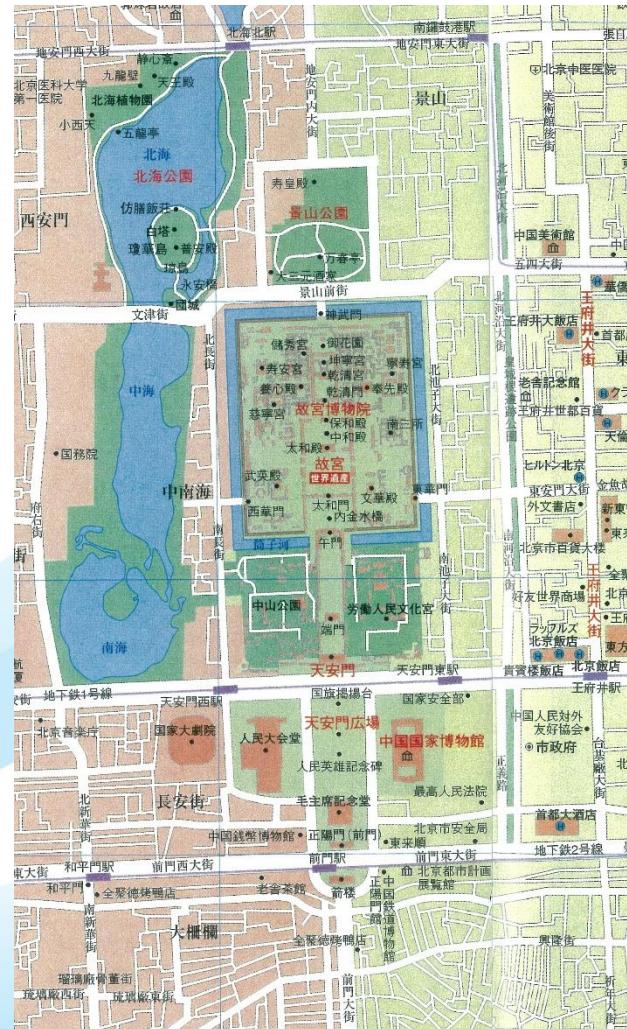
【天安門事件】詳説 世界史 改訂版 世界史B（山川出版）

『中国では1981年、文化大革命で失脚していた鄧小平を中心とした新指導部が成立した。…鄧小平らは…一連の経済改革（社会主義市場経済化）を実行し…しかし、急激な改革による社会の動搖を背景に、共産党の一党支配の持続や民主化なき経済改革への不満が学生・知識人の間に広がった。1989年、彼らは天安門広場に集まり、民主化を要求したが、政府はこれを武力でおさえ（天安門事件）、趙紫陽総書記を解任して、江沢民を後任に任命した。この事件で中国は国際的に厳しい批判をうけた。しかし経済改革・開放政策に変化はなく、90年以降 ASEAN諸国との関係を正常化し、97年にはイギリスから香港が返還された。』

* * *

まずは北京中心部の都市構造つまり紫禁城（故宮）とその周辺の空間構成から理解しなければ話は始まらない。朝日新聞北京特派員・中国総局長などを歴任した加藤千洋の『胡同(フート)の記憶北京夢華録（平凡社）』が天安門事件の顛末も含めて参考になる。少し長いが引用する。

『景山からは、紫禁城の南北に延びる直線上に、主要な建物が整然と配置されていることが一目瞭然である。これが北京マスタープランの背骨を構成する「中軸線」である。線の長さはハキ口に及ぶ。北と南の端は、北京の街のぐるりを囲んだ城壁にぶつかっている。この軸の西側に紫禁城の庭園である北海、中海、南海の三つ的人造湖が並ぶ。北海は公園として市民に開放されているが、後の二つ、すなわち「中南海」は現代中国で最も神秘的な場所。外国人はもちろん、庶民も近寄ることができない中国共産党と国務院（政府）の本部所在地となっている。…昔の北京は紫禁城を中心に城壁で囲まれた内城と、その南側に庶民の町としての外城が付属するという構造で、いわば大小二つの四角形を上下にくっつけた形をしていた。天安



土木屋の読書と旅（17）

令和4年7月

門広場の南に位置する前門は内城の表門という位置にあった。前門外というのは、その前門からさらに南側の外城の一体のことを言う。前門からは南前門大街という大通りがまっすぐ伸びており、その両側は昔もいまも商業地になっている。王府井大街のことを北京銀座という言い方があるが、前門外はちょっと庶民的で下町気分あふれる浅草界隈にたとえられる。皇城や満州族高官の豪邸がある内城に比べ、外城は漢族の居住地と定められ、多くは小商いの人々が住んでいた。』

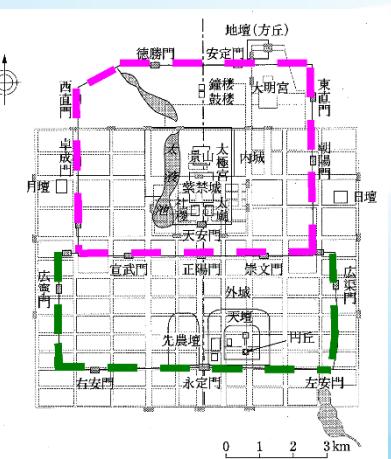
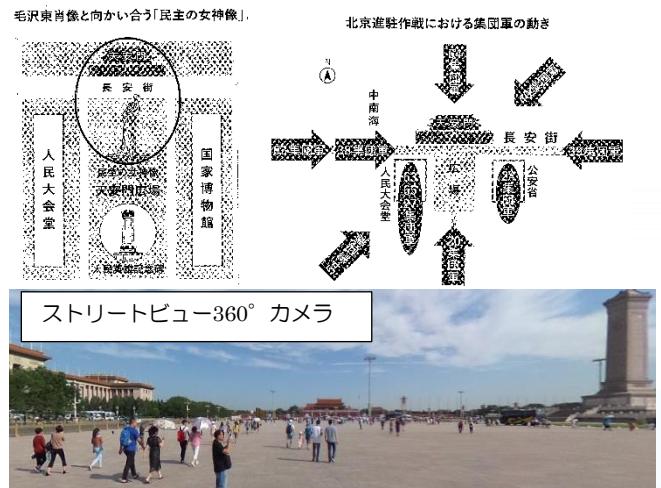
『その日の天安門広場は、初夏の一日を静かに終えようとしていた。土曜日ということもあり、いつもよりもゆったりとした気分が漂っていたように思う。…ただ天安門は通常の状態にはなかった。ここ一ヶ月余り、民主化を要求する学生たちが、中華人民共和国の建国が宣言された地であり、常に政治の中心にあった象徴的な広場の占拠を続けていた。翻る赤旗には参加した大学や職場の名が誇らしげに書かれていた。長安街に面する北東の角には美大生たちが石膏でこしらえた大きな立像があった。アメリカの「自由の女神」をモデルにした像は「民主の女神」と呼ばれ、市民の間でも学生運動のシンボルとしていられていた。カメラを持参した人々は孫や子供を中心に、それを入れて写真を撮るのが、ちょっとした流行となっていた。』

そして事件は起こった。時事通信社報道記事。下図は『天安門事件歴史的民主化運動の真相(加藤青延)』より
6/5(日) 7:09 配信 天安門事件 1989年6月に中国・北京の天安門広場に集まり民主化を求めていた学生らが共産党政権によって武力弾圧された事件。同年4月に急死した改革派指導者・胡耀邦元総書記を追悼する動きが発端となり、大規模な民主化運動に発展した。これに対し、最高指導者の鄧小平らは6月3日夜から4日かけて軍を動員し制圧。当局は死者を319人としているが実際はさらに多いとみられている。

* * *

天安門広場に表れている中国の空間意識や都市構造の意味については妹尾達夫（専攻・中国都市史）の『長安の都市計画（講談社選書メチエ）』に詳しい。引用する。

『…大和殿の南に、紫禁城の南の正門・午門がある。城壁の高さ一二メートル、門楼の高さ三鉢メートルで、紫禁城で最も高い建物である。その南の端門というやや小さな門をへると、紫禁城をかこむ皇城の南門である天安門にいたる。…天安門を通りぬけると、空間が一挙に開けて、目の前に、有名な天安門広場が広がる。信じられないようなことだが、天安門前の長安街を利用すれば、一〇〇万人規模の集会も可能といわれている。この天安門広場は、前近代の王都における都市構造と王朝儀礼の組み合わせが、近代国家の建設の過程で、近代の首都における都市構造と国家儀礼の組み合わせに変



土木屋の読書と旅（17）

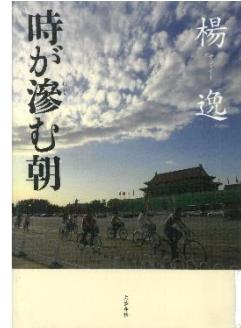
令和4年7月

貌してゆくことを、端的に示す絶好の事例である。……もともと、天安門広場は、中華人民共和国建国後に、…清末・中華民国以来の官庁街をつぶして造営されたもので、これほどの面積を有していたわけではない。社会主義国家建設に際して誕生した人民広場の一つであり、近代国家の建設とともに、世界各地に誕生した国民広場の一つでもある。…通常、国民広場は、どこの国でも、国民意識を生み出すための記念碑や記念堂によって、囲まれている。天安門広場の場合、東側に、国民の歴史をかたる中国革命博物館と中国歴史博物館が立てられており、西側には、国会に相当する人民大会堂が対をなしている。また、真ん中を国旗・五星红旗の掲揚台、建国戦争で亡くなった人々の靈を祭る人民英雄記念碑、建国の英雄・毛沢東をまつる毛主席記念堂が、北から南につづく。』

* * *

楊逸（ヤン・イー）：天安門事件を描く『時が滲む朝』で中国人初の芥川賞作家日本語を母国語といない「越境作家」として注目される。彼女は「越境作家には『居心地が良いから越境してきた作家』と『越境を余儀なくされた作家』とがいる。自分は後者に近いという。（読売新聞読書欄）

この小説は1988年7月中国の大学統一試験の会場の描写から始まり、地方の著名大学での寮生活、学生運動、そして天安門事件を経ての主人公をはじめとする登場人物たちのそれぞれの人生模様、そして再会へと進む。



『けど、大学の宿舎で、こういう不健康的な靡靡之音を聞くって、大丈夫か？』…テレサ・テンをはじめとする香港や台湾の流行歌手の歌、みんなそれぞれ独自のルートで入手できるテープを持ち寄って聞く。音量をみんなの耳に届くぐらいまで下げ、全員が布団に入って息を潜め、高鳴る胸を抑えつつ、ひと時を享受する。（学生寮生活の一場面）』

『天安門広場は全国から集まってきた学生で埋め尽くされている。自由に憧れる学生たちの思いを象徴して人民英雄記念碑の傍に自由の女神が建てられた。人生の一シーンを記録しようと、学生たちは貪欲に甘先生のカメラを使いまわし、教科書の挿絵でしか見たことのない名所に自分の姿を収めようとした。（5月の終わり初めて北京に行った場面）』

『六月三日の朝、市政府の様子が俄かに慌ただしくなった。…学生たちはひたすら先生の言葉を待った。「装甲部隊が天安門広場に突入した」喉の奥に怪獣がいるような声だった。…「僕らは騙されたんですか？」（地元の大学での場面）』

この小説を読んで思い出したことが二つある。ひとつは返還（1995年）前に行つた香港のこと。30歳代の中國人ガイドとの会話、彼曰く「自分は本土では生活できないため、夜海を泳いで渡ってきた。テレサ・テン（鄧麗君）は香港で大変人気がある歌手である（アクネス・チャンは話題にも上がらない）。香港の店で交渉は自分が不利になる相手の間違いは厳しくクレームすること。こちらが有利になる相手の間違いは黙っていればよい、相手は商売人であるのだから。」もう一つは‘80年代に流行つたジョーク「昼は鄧小平、夜は鄧麗君（テレ・テン）が支配する」である。

* * *

天安門事件は胡耀邦元総書記を追悼する動きを政府が抑制したことが発端となったといわれているが、では学生・市民に慕われた胡耀邦とはいかなる人物か。加藤千洋の『胡同(フーツ)の記憶 北京夢華録（平凡社）』につづりのような記述がある。

土木屋の読書と旅（17）

令和4年7月

『胡耀邦は小柄ながら果敢な姿勢を全身にみなぎらせた政治家だった。私は彼の率直で飾らぬ物言いや人柄に好感を抱いていた。彼にまつわる、忘れられないエピソードがある。作家山崎豊子さんが「大地の子」を書くのを強く支持したのは胡耀邦だった。そのために当時、外国人にはまだ公開していなかった地方や、刑務所などの取材を特別に認めた。山崎さんは取材旅行のおりにいつも胡耀邦と面談していた。』 *山崎豊子は『白い巨塔』『不毛地帯』など壮大な人間ドラマを長編小説として書いた小説家

山崎豊子が亡くなった後、膨大な取材テープの中に極めて貴重な記録が残されているのが分かった。胡耀邦中国共産党総書記との3回に及ぶ会談の音声記録である。一部を次の文献から抜粋する。

『”胡耀邦”がいた時代 —『大地の子』と“日中蜜月”と天安門事件—』佐藤雄介（NHK報道局社会番組部ディレクター）：立命館国際研究 32・4, March 2020

山崎「私は中国を愛しています。もし中国の悪い面を書いても、愛すればこそその愛の鞭と思ってください」

胡耀邦「うんうん、いいですね、賛成です。間違いを克服しながら、後から前進する。これが中国です」

胡耀邦「私は20年前、日本の映画を2本みました。1つは『山本五十六』で。もう1つは『あゝ海軍』。私は『山本五十六』は良かったと思っています。ストーリーは真実でした」

山崎「いや、その今の胡先生のお言葉で『山本五十六』を見て、拒否しないで真実を描いているという言葉には、非常に柔軟な頭と寛容な精神を感じますね」

胡耀邦「しかし、この映画を中国国内で公開することは賛成しませんよ」

山崎「どうしてですか？」

胡耀邦「山本五十六の愛国心は極めて狭い」

山崎「どういう点が狭いと思われましたか？」

胡耀邦「戦時中は、私たち中国人民の利益と東南アジアの人々の利益を考えなかつたからです。それは狭すぎる愛国心ですから」

胡耀邦「歴史上の感情が完全になくなることは、たぶん不可能でしょう。でも、その感情を徐々に薄くしていくことは可能です。例えば、第2次世界大戦のことを忘れさせるのは恐らく無理でしょう。しかし1900年の義和団の乱で8か国と戦った中国人の記憶は既に薄れています。1900年から今日まで85年が経ちます。ですから1930年代から40年代までに中日両国に起こった問題はあと40年経ったら薄くなっていくのだろうと思います」

胡耀邦「日本人が愛国主義だけを提案し、日中友好を提唱しないなら、このような愛国主義は不健全だと私は考えます。国を誤るという『誤国思想』『誤国主義』です。みなさんには『誤国主義』を防いでほしいと思います。中国の場合も、中日友好を重んじない愛国主義は不健全です。我々が開放政策を実行しなければ、日本人と長期的友好的に付き合っていくことを重んじなければ、世界の人々、世界各国と長期的に付き合っていくことを重んじなければ、国の進路を誤ることになってしまします。私たちも『誤国主義』を防がなければならないのです。愛国心の行きすぎを日本も中国も防がなければなりません」

土木屋の読書と旅（17）

令和4年7月

胡耀邦は、山崎さんとの会談の3カ月後、突如、総書記の座を追われることになった。

『胡同(フトソ)のことを「街を縦横に走る毛細血管」とたとえたが、それは北京の都市の骨格を形づくる大街(大通り)に比べ、概して道路幅が狭いからである。

……通常、中国の指導者は中南海と呼ばれる、故宮の西側の高い屏で囲まれた特別地区に住んでいるといわれる。…以前は確かに毛沢東や周恩来ら指導者が住んでいたが、江沢民総書記の時代には、江が居を構えた以外、他の指導者らは中南海の外に住んでいた。胡耀



邦もそうだった。住まいは故宮と中南海の間を南北に走る北長街から西へ、つまり中南海側へ入った胡同にあった。その名前は会計司胡同という
（「胡同の記憶」加藤千洋）】



山崎豊子との会談で、胡耀邦がすでに中国人の記憶が薄れている例として挙げた「義和団事件」は天安門広場の東隣の一区画で起こっている。義和団事件の当事者(日本人)の記録としては『北京籠城 北京籠城日記／柴五郎・服部宇之吉(平凡社東洋文庫)』が有名。

【義和団事件】詳説 世界史 改訂版（山川出版）

列強による分割が進行するにつれ、中国民衆の排外運動が激化してきた。…中でも、山東の農村の自警団組織を基盤に生れてきた宗教的武術集団の義和団は「扶清滅洋」をとなえて鉄道やキリスト教会を破壊し、宣教師や信徒を排撃した。義和団が北京城内に入ると、清朝の保守排外派はこの運動を利用して列強に対抗しようとし、各国に宣戦を布告した。各国は在留外国人の保護を名目に共同出兵にふみきり、日本とロシアを主力とする8か国の連合軍は北京を占領し、在外外国人を救出した（義和団事件）。1901年、敗れた清は北京議定書に調印し、巨額の賠償金の支払い、外国軍隊の北京駐屯などを認めた。

* * *



中国の大学において北京大学と双璧をなす清华大学は、1911年に米国政府より返還された義和団事件の賠償金をもとに設立された「清华学堂」が前身で、その後名称を「清华学校」(米国留学予備校)に変更、1928年に「国立清华大学」となった。1952年理工系の総合大学として編成され、理工系科学技術人材の養成校となり、1978年から「改革開放」政策の中で、逐次人文社会科学関連の学科を増設して現在に至っている。歴史の摩訶不思議な因果関係である。

改革派であった総書記胡耀邦・趙紫陽失脚後の江沢民から始まる中国政治のベクトルをみると、天安門事件が中国現代史における一つのターニングポイントであったように思える。 古谷 健